

令和5年度 大学教育センター「授業研究」(FD研修)の記録

本学では、よりよい授業実践を目指して、授業の可視化を目標の一つに掲げ、大学教育センターを中心に授業研究を実施している。

授業研究という手法は、我が国において明治以来、特に初等・中等教育の現場で積み重ねられており、教員の実践力向上におおいに寄与してきたと見られる。これは、高等教育においても授業の改善のために有効な一つの手法であろうか。

専門の壁が高く聳えるなかで、同じ科目を担当する教員同士にとどまらず、異なる科目の授業においてもこれを行い、授業後には批評会を開いてみる。批評会では、授業者：自らの授業課題をフィードバックするだけでなく、学修者の実態に関する認識も共有して、各々の授業実践を客観化し、同僚間で互いに授業改善の方策を探ろうとする。

本年度は、共通基礎科目に位置づく「英語Ⅰ」、人間文化学部の学部共通教育科目である「生活文化史」、さらに「英語Ⅰ」と同じく共通基礎科目の「中国語Ⅱ」の計3回の授業研究であった。大学教育センターの専門を異にする教員らが、各授業を観察し、独自の評価指標に沿って評定を行い、各授業を相互に検証・批評した。

高く聳える専門の壁を前にしながらも、たまには攀じ登って向こう側を覗いてみると新鮮な気分にもなって、新しく気づかされることもあり、気軽にもなるらしい。以下が、各回の記録である。

(大学教育センター教授 今井 航)

第1回授業研究会(第2回 FD研修)

日 時：6月13日(火)4限(14:50~16:20)

場 所：01320教室

授業担当者：松本 陵磨 講師

授業科目名：英語Ⅰ

参加者：今井、大塚、鶴田、松岡、日暮

本研究授業は「ENGLISH FOR WORLD TRAVEL」(英宝社)のUNIT2を対象とし、特にイギリスの公共交通機関の切符の購入プロセスを通じて、英語の発音練習や実生活での言語活用能力を高めることを目的としている。授業の目的は多岐にわたり、1)特に/s/と/sh/の発音の聞き分けと言い分け能力の向上、2)英語圏の公共交通機関の切符記載内容の解読能力の向上、そして、3)日英で意味を間違えやすい日常表現の理解を通じた作文能力の向上、に焦点を当てた。このような目的設定は、学生が実生活で直面する可能性のあるシチュエーションに対処できるようにするためである。

使用した教科書は、留学や国際ビジネスの場面で遭遇する可能性が高いシチュエーションを想定した対話形式で構成されている。これにより、学生は英語の言語活用能力だけでなく、国際的な教養とコモンセンスの習得を目指せるようになっている。

対象となった学生は、英語に対して苦手意識を持つ者も含め、多くは授業に前向きに取り組む姿勢が見られた。このため、アクティブラーニングやペアワークなどを積極的に取り入れることで、学生のモチベーションを向上させ、苦手意識を払拭することに重点を置いた。

授業では、今回は/sh/と/s/の発音練習に焦点を当て、間違えやすい発音のリストに基づくプリント資料を用いて実践的な練習を行った。さらに、イギリスの鉄道切符を用いた解読活動を通じて、公共交通機関の利用に必要な知識と英語能力の養成に努めた。この活動では、実際の切符の写真を渡し、インターネットで内容を検索し、結果をペアで話し合うことを通じて、学生に実践的な学習経験を促した。

また、日英で意味を間違えやすい表現に焦点を当てた作文練習では、学生のライティングスキルの向上を目指した。授業終了間際の「レビュー」では、学生が授業内容を逆順に振り返ることで、学習内容の理解と定着を促進した。

この研究授業は、学生の言語活用能力だけでなく、国際的な教養とコモンセンスの習得を目指すことにより、将来的に海外で活躍する機会が増える現代社会において、学生たちが直面する可能性のあるシチュエーションに対処できる能力を育成することを目標としている。授業を通じて、少しでも学生が英語の発音の正確性を高めると同時に、英語を使用する際の実践的な能力を身につける心構えができたのであれば幸いである。特に、一例ではあるが公共交通機関の切符の解読や、文化的な違いに注意を払いながらのコミュニケーション能力の向上は、学生が国際社会で生きる上で不可欠なスキルである。

この授業研究から、学生たちは英語学習の新しい側面を探求する機会を持ったことを願い、筆者も授業方法について考えるきっかけを得た。今後も、この種の研究授業が学生の好奇心を引き出し、教育内容を充実させる助けとなることを願っている。なお、本研究授業の内容及び指導案は次のとおりである。

研究授業指導略案

- 1 授業担当 松本 陵磨 (大学教育センター)
- 2 科目 英語 I (共通基礎科目、人間文化学部・生命工学部 1 年次担当、火曜日 4 限)
- 3 日時 2023 年 6 月 13 日 (火) 4 限 (第 9 回)
- 4 教室 01320 教室
- 5 履修者数 33 名
- 6 単元名 ENGLISH FOR WORLD TRAVEL (英宝社) UNIT 2
- 7 単元詳細

1) 教材観

本単元に使用する教科書は、大学生の主人公が世界の様々な国に旅行に出かけ、いろいろな状況において現地の人物と対話をする場面で構成されている。その中で本単元は、主人公がイギリス・ロンドンやエディンバラに出かける場面であり、留学中に遭遇する可能性の高いシチュエーションはもとより、将来海外に出た際や国際ビジネスなどにて必要となりうる場面における言語活用や教養習得を促すことができる教材。

2) 学生観

本授業対象の学生は、英語を苦手と感じている学生も含め、多くが授業に前向きに取り組む。ペアワーク等の際、相互に調べた内容に対して積極的に意見交換をする等、モチベーションは高い。しかし、英語に対する苦手意識が高い傾向にあり、その払拭に苦慮する。

3) 指導観

上記のような学生観に基づき、本単元においては次の 3 点に重点を置いた指導を心がけてい



る。

- ① 学生の主体的な学びとなるよう、アクティブラーニングを積極的に取り入れた言語活動設定を行う。
- ② 将来海外に出た際や国際ビジネスなどに必要となる教養・コモンセンスを養うことを目的に、英語圏の文化・習慣などにも適時触れ、英語総合能力の定着を目指す言語活動設定を行う。
- ③ 英語の苦手意識を払拭させるため、英語の面白さや必要性を強調する言語活動設定を行う。

8 単元の目標・評価規準

- 1) 語彙：3,000 語程度。
- 2) 音読：文字や符号を認識し、語と語の区切りなどに注意し、英語らしい発音やイントネーションで正しく音読できる。
- 3) リスニング：自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、情報を聞き取ることができる。
- 4) リーディング：まとまりのある英文や学習した英文の概要や要点を読み取ることができる。また教科書の文章を1分間に100語以上のスピードで読むことができる。
- 5) ライティング：学習した語彙や表現を利用して、パラグラフライティングを正確にすることができる。
- 6) スピーキング：身近なことについて簡単なやり取りができ、自分のことや個人的に関心のあることなど1分程度述べることができる。
- 7) 自律学習：英語学習に当たりネット検索や辞書を活用すること（発音、意味関係、連語等）ができる。自分の学習方略を確立することができる。
- 8) 教養習得：旅行やビジネス等での旅行の際、困らない最低限の行動知識を身に付ける。

9 単元指導計画・評価計画（全15回）

回	学習内容	評価規準	評価方法
第1回		1)～8)	活動観察
第2回		1)～8)	活動観察
第3回	・語句の確認をしていく。	1)～8)	小テスト
第4回		1)～8)	活動観察
第5回		1)～8)	活動観察
第6回		1)～8)	活動観察
第7回	・語句の確認をしていく。	1)～8)	小テスト
第8回	・テキスト：Unit 2 Buying a train ticket ・英文内の語（句）を確認していく。 ・英文を聞き、内容を想像し理解する。 ・テキストの問題を解き、確認する。 ・英語の発音練習やペアワークをする。	1)～8)	活動観察
第9回 (本時)	・テキスト：Unit 2 Buying a train ticket ・英語の発音練習やペアワークをする。 ・関連する実践教養を身に付ける。 ・簡単な作文と表現を学ぶ。	1)～8)	活動観察
第10回	・テキスト：Unit 2 Buying a train ticket	1)～8)	

	<ul style="list-style-type: none"> ・英語の発音練習やペアワークをする ・関連する実践教養を身に付ける。 ・関連する表現を学ぶ。 		活動観察
第 11 回	・語句の確認をしていく。	1) ~ 8)	小テスト
第 12 回		1) ~ 8)	活動観察
第 13 回		1) ~ 8)	活動観察
第 14 回		1) ~ 8)	活動観察
第 15 回		1) ~ 8)	期末試験

10 本時について

1) 本時のねらい

- ① 似た発音の聞き分けと言い分けができるようになる（本時は、/SH/と/S/音の違いを具体例としてあげる）。
- ② 英語圏で発行される公共交通機関の切符記載内容を解読できるようになる（本時は、イギリスの鉄道の切符を具体例としてあげる）。
- ③ 作文練習を通じて、日英で意味を間違えやすい日常表現を理解することができるようになる（本時は、意味を間違えたとおかしい具体例を 3 例あげる）。

2) 本時の指導過程と評価規準

時間	学習活動内容	指導上の留意事項	評価規準
2 min	○本時の学習内容の確認 1) 板書の説明。		
10 min	○10-MIN READING 1) 任意の書籍を任意のスピードで読む。	机間指導。	ページ数等の申告
10 min	○質疑応答 1) 出席カードに記載されている前回授業に関する内容その他の質問に答える。	必要に応じて事前にHP等の資料を準備しておく。	
25 min	○発音練習 /SH/と/S/ 1) 間違えやすい発音リスト記載のプリントに沿って説明及び音読練習する。 2) 早口言葉のプリントを使って発音練習する。 3) 前回音読した教科書 13 ページの該当箇所を音読練習、個別確認をする。	学生 1 名ずつ音声確認及び指導。	活動観察
25 min	○教科書 11 ページを参考に鉄道の切符を解読後、ネットで切符を検索 1) 配布切符写真を見ただけで内容を推測することを指示。 2) 新規単語や略語についてネット検索を指示。 3) 検索内容をペアで話し合うことを指示。 4) 各ペア 1 点ずつ検索内容を発表指示。 5) 答え合わせをする。 6) https://www.nationalrail.co.uk/ にて実際の切符を検索する。	万遍無く学生が発言しているか、調べものを行っているか確認。学生の教科書やノートへの記載事項を、机間指導をしながら確認。反応と時間を見ながら、説明を増減する。	活動観察
10 min	○作文練習のプリントを配布し、間違えたとお	机間指導。	

	かしな表現 3 例を提示する 1) プリントを配布し、翻訳と作文を指示。 2) ペアで確認指示及び答え合わせをする。		活動観察
3 min	○REVIEW 1) 本時に行った学習内容を、ペアにて、最後から最初に向けて逆に思い返すよう指示。 2) 全体で内容を再確認する。	学生発言内容の確認。	活動観察
5 min	○出席カード記載 1) 終了約 5 分前に出席カードを配り記載を指示。 ① 本日の新発見 ② 質問・コメント → 提出後退席。	記載事項の確認。	提出物の精査等

第1回授業研究批評会まとめ

日 時：6月14日（水）12：15～13：00

場 所：学修支援相談室（1号館01322室）

参加者：松本、今井、大塚、小野、Suzuki、Tang、鶴田、Driussi、Lowe、記谷、地主、日暮

観察者：昨日、英語 I の授業を研究授業の対象に行った。当日は、研究授業指導略案も配布された。目標・評価基準、指導計画等が示されていた。

授業者：本来は 15 分間のリーディングを行うが、前回やり残したことがあったため、5 分削った。このクラスもそうだが、いくつかのクラスでふざける学生が多い。落ち着かせるためと、学生が 90 分間もたないので、リーディングを行う。英語の本であればなんでも良いということにしている。多くの学生が漫画でもいいかと尋ねるので、一応 OK ということにしている。質問コーナーの際、授業に関係ない質問を取り扱っているのではないかと指摘があった。以前は関係あることだけをピックアップして返事をしていたが、「なぜ自分の質問には返事をしてくれないのか」と食い下がる学生がいたため、平等にするために全部読むことにしている。ただ、クラスで発表できないような個人的な質問は答えないようにしている。ただし、人数が多いクラスであれば、全ての質問に返事をするのは考えた方がいいかもしれない。発音練習について、教科書は、0 課から始まって、1 課、2 課と進み、今回は 2 課の 2 回目であった。前回までは、1 センテンスの中でのどこを繋げたら良いかなどに触れてきた。今回は、全体の発音練習を行った。全体の流れから、特に日本人がよく間違えるような箇所を取り上げ、一単語、一発音ごとの練習に入った。学生一人一人を見て回る時間がある場合は、確認するようにしている。今回焦って良くなかったところは、この授業は人数が一番多いクラスなので、一人一人を相手にする時間が限られていたこと。そこをどうしていこうかというのが課題であると認識している。その後、教科書 11 ページの時刻表に則って、「Dep」等の略語を読み解くことから始まり、今回実物教材がなかったので、写真で鉄道切符の解説を試みた。その中で、ちょっとした文化的なこととか、特に日付の略がイギリスの鉄道会社では少し違う、国によっても違うこともある、とうようなことを強調してみた。最後に、本当は実際の鉄道切符をインターネットで買って欲しかったが、ネット環境がよくなかったことと、時間的にも押してしまったので、私が代表して購入するデモンストレ

ーションをした。学生には Cerezo を通じてリンクをその場で送り、家行くよう指示をした。この後教科書 13 ページにある会話文があり、ここでは主人公の Yuta が駅に行って切符を買うところである。ここは前回も読み、次回も読んで、発音的にも完璧にし、こういう状況の時にこのように言えばいいということに触れたいという意味で、各課 3 回で完了するようにしている。最後に、Warm-up Writing とあるが、ここでは作文を促している。ここでは新たに表現を勉強できたという意味で warm-up である。これら表現を用いて更に長い作文としていく。毎回 3 問くらい学



生に出し、調べながら知識を総動員しながら表現を書いていってもらおう。レベルの低いクラスでは、学生は翻訳ソフトを使ってそのまま訳す場合も見受けられるが、間違った表現になることが多い。翻訳ソフトでは間違った表現が出てくることを示すきっかけとなっている。最後のレビューであるが、「忘れ」と「思い出し」を何回も繰り返すことによって、頭に残っていくという考え方のもとに、今日やってきたものを、初めから同じ向きでやると簡単であるのだが、逆向きにレビューを行う。そうすると、順序を飛ばしたりし、抜けた箇所等の指摘が入り、情景が頭の中に蘇ればという感じでレビューを行っている。時間がないときは、この作業は飛ばすこともある。出席カードは、質問があれば書いてもらう。授業で私が発言した内容でもっと詳しく知りたい場合などの活用を含め、時にはインテリな質問もあったり、どうでもいい質問もあったりするが、公平にコメントするようにしている。授業の狙いとしては、ただ単に読み書きではなくて、文化を含めたアクティブラーニングで英語を好きになってもらい、英語に限らず、国際的な活動を好きになってもらいたいという思いでしている。

観察者：今日のメニューで、今日何を学ぶかを示された。終了間際に、もう一度レビューをして、学生に理解させたのは非常に良かった。読書の時間に、日本語の本を読んでいる学生もいた。前回の質問に回答していたのは、非常に評価できた。単に英語の語学学修ではなく、異文化理解につながるやりとりについて、大いに啓発された。質問への回答を日常的に実施しているのであれば、学生との意思疎通に最適であろうと感じた。「s」と「sh」のように日本人には非常に聞き取りにくい発音の練習を繰り返すことはすばらしい。そのほかにも発音が困難な音をどうやって網羅的に学ばせようとするのか、授業全体の中でどのように扱うのか疑問である。Wi-Fi がつながりにくいのは、事前にわかっていてはいいのだろうか。そうであれば、早急に部屋の Wi-Fi 環境の改良をしなければいけない。特にネット情報を多用する授業であれば、教室の選定に問題がある。イギリスでチケットを購入する疑似体験をすることは、教育効果が高い。できれば、あの場で全員がスムーズに行える環境の整備が必要である。また、スマホのみではなく、パソコン持参の学生がたくさんいたのは、BYOD の時代に嬉しい発見であった。全体の展開がスピーディーで、一部の学生には早すぎるのではないかという印象を持った。話し方も若干早すぎるのではないか。授業での間の取り方が大切だと感じた。

観察者：なぜ Wi-Fi がスムーズにつながる部屋を使わないのか。20 数名の人数にして、教室が狭すぎると思う。

授業者：たまたまあの部屋になった。連続で授業をするのに同じ部屋を確保するのが難しかった。Wi-Fi も最初はよくつながったが、だんだん悪くなってきた。読書の時間を設けることについては、今まで勉強してきた英語が実際に使えるという成功体験をしてほしいということで、簡単な本でもよいとしている。日本語と英語が両方書いてある本は認めている。発音の練習については、教科書に沿ってやっており、今回は発音練習プリントの Type 7 を取り扱い「s」と「sh」が多い。来週は Type 8 で「th」の発音、Type 9 で「z」の発音をやる。日本人であれば難しいと感じる可能性のある発音をメインに行っている。

観察者：帽子をかぶった学生がいたが、注意しないのか。おしゃれと身だしなみの違いを知ってもらいたいと思っている。

授業者：野球帽は取るように言っているが、端にいた学生は気がつかなかった。

観察者：昔は、教科書を訳して終わっていたので、新鮮に感じた。ただ、少しスピーディーについていけない学生がいるかもしれない。

授業者：このクラスは、レベルが低いクラスの学生で少し早く感じるかもしれない。去年は、上のクラスの学生が担当で更に早い速度で進めていた。早すぎるようであれば少し考えなければならない。

観察者：質疑応答のところで、授業に関係ない質問に回答していることについて、学生との意思疎通に最適であるという意見があったが、どう考えるか。

観察者：科目は違うが、物理でそれをやっているとほとんど授業が進まない。ただ、授業に興味を持ってなくて、特にちょっとレベルが低い方の学生に対しては、それよって先生の方に向くことも考えられ、ある程度それもありだと思う。問題はやはり時間配分だ。90分しかないから、それをどう空けるかということが一番問題だ。

観察者：タイムマネジメントの問題とこれはリンクさせて考える必要があると思う。全部返事をするということ自体を否定はしないが、限られた時間の中で、その中でその授業内容をということが前提にあるので、そこは議論があってもいいとは思う。

授業者：もっと英語レベルの低いクラスでは、大半が関係のない質問だが、発表してもらおうのを心待ちにしている学生もいて、難しい問題である。

観察者：そういう関係のない質問をしている学生の中で、授業とリンクしている可能性はあるのか。

授業者：全く関係ないこともない。初めお互い全然知らないの、アイスブレイキングの意味で始めたが、もうやめてもいいかもしれない。特に発音練習にて「r」の発音と「l」の発音の違いを前回と前々回行ったが、もう一回やってほしいという質問が多くてやり直した。特に「r」が難しいようだ。おそらく来週は、「th」が出てくるので、そういうところに時間を割くためには、やはりどうでも良い質問は削った方がいいのかもしれないと思う。全員が質問を書いているわけではないが、例えば30人で20人が書いていて、3人だけ削ると、なぜ自分の質問に回答してくれなかったのかというのがあったときに、対応が難しい。

観察者：正攻法に質問することに、ある種のテレのようなものがあるのかもしれない。先生の学生感の中に、英語に対する苦手意識という表現を出していたが、少し違って、自分がよくわかっていないということをおのれで自己開示するのが恥ずかしいのではないだろうか。それを苦手意識のような形で示しているのではないか。学生の苦手意識の種類が違うのではないか。全部質問を拾い上げることは悪くないが、どう持って行こうとするかである。授業の計画もあるので、これはまたにしようとしてもいいかもしれない。

授業者：大半は必要な質問である。面白いと思うものもあるし、結構気づかされることもある。

観察者：発音練習の時間が長すぎるのではないか。

観察者：私も授業の流れが分からなかった。発音の練習の授業だと思った。終りの方に Reading もやっていたが、Reading もあるんだと思った。

観察者：教科書の会話は、実際に経験するかもしれないので、よいと思った。この会話で実際に鉄道の切符を購入することができる。しかし、今回は発声練習しかなかったように感じた。

授業者：この UNIT を3回に分けて授業を行っている。前回は文章を読んで流れを説明している。今回は発音の練習をした。次回は会話の練習をする。

観察者：今回、学生はあまりしゃべっていなかったが、前回はもっとしゃべっていたのか。

授業者：1回目は単純に繰り返し文章を読んでいる。今回は発音の間違いを直す練習をしている。来週は、Reading でもっとしゃべることになる。

観察者：しっかり発音について説明していたが、発音だけではコミュニケーションができない。分かれると聞くは違う。

授業者：ここだけを抜き出してみるのではなく、全体に戻してみるというのは大切かと思う。

観察者：内容が多くて、ペースが速かったと感じた。それでも学生が飽きないようなペースだったのではないか。コメントも Cerezo の掲示板で返事を行ってはどうか。

観察者：Cerezo のコメントも英語で書いたらどうか。英語の勉強の為ではなく、興味があるからであって、本当のコミュニケーションになる。

授業者：その一環で本を読んでほしいと思っている。絵本でもいいから自分の習ってきたもので読めるという体験をして欲しい。Cerezo に掲載するという事について、いつもは、関連するホームページのリンク先などを載せている。それは、練習するサイトもあれば、昨日だったら切符のサイトとか、質問の中でこれというサイトがあれば載せるようにはしている。昨日もらったループリックのコメントの中に、中国では4技能ではなく、5技能で行っているという記載があった。読み、書き、話すと、そのインストラクションに従えるという5つ目の技能をやるらしい。そう考えた時に、そのインストラクションを英語で少し言ったらどうかという事であった。去年、少しやったことはあったのだが、そうだと思う。これは来週から始めてみようかと思う。

観察者：全体的に面白かった。壁のポスターのことも。部屋の狭さは気になった。

授業者：本来は立って、音楽を流して、音楽が止まったら、ペアと話してとか、そういうことをしたいができない。

観察者：大きなテレビだが、少し小さい。

授業者：たしかに字が読めない。

観察者：基本的には手元に資料があるということか。

授業者：資料がある。本当はもっと大きなスクリーンがあった方が良いとは思っている。

観察者：評価について質問するが、机間巡視の時に何を見ているのか。

授業者：メモを見ている。どれだけノートに書くのかということである。ノートに書かないでという教育方法もあると思うが、学生のレベルとノートに書く量が正比例するように感じている。必要なものはメモするように指示し、後から見直せるからということ強調し、そこは重視している。それから、ちょっとした会話とかたわごとを隣同士で話しているのに聞き耳を立てている。それをクラスでも確認している。質問カードも評価をしている。期末試験は口述試験だが、発音をきちんと学修できているか、暗記できているかとかを見ている。見ていると、この学生はよくやっているというのが分かって、できていたらクラス全体を手伝ってもらおうようにしている。

観察者：私も評価としては、できる、わかる、人に教えられるっていうのを段階で見ている。

授業者：評価について学生に聞かれた時にきちんと説明したい。

観察者：先生が説明しながら、学生の様子を見ながら、をやっているとしたら大変である。

授業者：特に昼休み後の授業は、スピードを上げないと学生が寝てしまう。特に内容を難しいと感じる学生には、行う箇所を限定するなどの指示をしている。

観察者：クラスによって UNIT の全てをしなくてもいいのではないか。

授業者：全体的に減らして、もっとゆっくりしてもいいかもしれない。これでもゆっくりしすぎていると思っているが。

第2回授業研究会（第3回FD研修）

日 時：10月26日（木）3限（13:10~14:40）

場 所：C0201（未来創造館2階 大講義室）

授業担当者：村上 亮 准教授

授業科目名：生活文化史

参加者：大塚、鶴田、今井、記谷、前田、日暮

本科目「生活文化史」は人間文化学科の専門基礎科目であり、また人間文化学部の共通科目である。また今年まで隔年開講であるため、受講層は学年、学科ともに幅広い点に特徴がある。今年を受講者は144名だが、毎回の出席者はおよそ120名である。講義に際しては、毎回レジュメとパワーポイント資料を用意するとともに、可能な場合には映像資料も用いている。評価は期末レポート、ならびに毎回の授業時のリアクションペーパーなどから総合的に判断するものである。



前述のとおり受講者の広さをふまえ、全15回の講義を通した狙いは、われわれの生活にとって身近な食物と衣服を糸口として、日本を含めた世界史の断片をながめてみよう、というものである。具体例をあげると、砂糖や紅茶からイギリス史、ジャガイモからドイツ史やアイルランド史、マリー・アントワネットにまつわる衣食住からフランス史（フランス革命）、ファーストフードや禁酒からアメリカ史を展望する試みなどである。また、——わたしたちにとって身近なものといえる——給食の歴史、あるいは天皇の衣装から近代化を再考する日本を舞台に設定することもある。

私たちは「何を食べ、何を着るのか」。これにはさまざまな要因が関連する。個人の嗜好はいうまでもないが、経済力やそれと関連する価格設定、各々の社会における伝統や流行、身体的条件に加え、外部からの新たな文物の流入、学校や企業などをはじめとする、さまざまな集団内の規則などがあげられるだろう。わが国においては意識することが少ないかもしれないが、宗教の戒律による縛りも決して無視できない。いまひとつ付け加えるとすれば、食物と衣装のいずれも社会的意味を帯びていること、つまり自身の富や権力を示すツールであることも考慮に含めるべきだろう。以上を簡単にまとめるならば、食べものと着るものには、さまざまな要素が影響を及ぼしているのだ。

とくに食については、以下の指摘を引いておくべきだろう。「各民族、各国の文明が進むと人々の食生活にも、食材、調理法、加工法、味付けなどにそれぞれの特徴が現れ、関連して調理道具、台所、食事道具そして食事のマナー、食事のしきたり、嗜好などに特徴的な様相が形作られた。これらが食の文化である。文化とはそれぞれの集団における行動様式や生活様式の個別的、特徴的な様相で、衣食住のほか、集団内の構成、しきたり、芸能などにそれぞれ文化がある。集団のサイズも民族全体、国家全体から、地域、集落と、大きな集団から小さな集団までを含み、食文化については民族間の違いから、同じ民族内の地域間、また同じ地域内の集落間の差異がある。極端に言えば各家族ごとに微妙な食文化の違いがある。かくて地球上には多様な食文化が発展した¹⁾」。この一節を読むだけで、食の歴史が「何を食べるか」だけにとどまらないことがわかる。

今回の授業研究に提供した第5回は「イギリス料理の「まずさ」：その源流をたずねて」である。このテーマは筆者が、イギリスの食文化に関する小野塚知二氏の論考¹¹⁾に出会ったことをきっかけに生まれた。主題はイギリスの食文化、より正確を期せばその「まずさ」の要因を考えようというものである。イギリスの食に対する一般的な評価が「まずい」と判断して大過ないが、その背景に——世界史で必ず言及される——産業革命という社会経済上の一大変革があったことを示す点が授業の核である。

もっとも、主題選びは間違っていなかったと考えるが、内容を2回に分割した方が学生の理解という観点では良かったのかもしれない。つまり、授業中に触れたフィッシュアンドチップスをもう少し深掘りすることで、イギリスの食文化史をより広くとらえられたのではないかと、との反省である。また今回に先だつ2回がイギリス絡みの内容だったこともふまえ、より前後のつながりを分かりやすく

示すべきだったのかもしれない。

第2回授業研究批評会まとめ

日時：10月27日（金）12：15～13：00

場所：学修支援相談室（1号館01322室）

参加者：村上、今井、大塚、地主、小野、記谷、前田、松本、日暮

観察者：昨日3限目に、人間文化学科の村上亮准教授の生活文化史の授業を行った。この科目は学部共通教育科目であった。昨日の90分の授業の時間配分は、大きくは四つに分かれる。最初、「代表的なイギリスの料理とは？」から入って10分、「食材の変化」から論じていった。その手前の「料理をみるための「三つの指標」」があり、その次に入るまで20分使っていた。そして、その食材の変化について表等を通じて見て、プリントの裏側の「食文化の需要をめぐる問題」、「食の供給性」、「伝統的な食を支える要素の消滅」とトピックが進んでいった。3の「イギリス料理の「空洞化」」の手前まで14時10分であった。プリントの表の表が、全部話が終わって、裏に移った瞬間が13時40分で、ここから3の空洞化まで、30分使って14時10分。まとめのところが14時25分から14時35分あたりで終了した。この生活文化史は学生の手元にテキストはなしか。

授業者：使用していません。毎回レジュメを配布しています。

観察者：それでは昨日の授業の振り返りをする。

授業者：まず授業を始める際にミスをした。普段は教室の後ろに余ったプリントを置いておき、後から来た学生が勝手にとっていくが、昨日は教室の前に置いておいたため、学生が三々五々取りに来てしまい、うっかり「こんにちは」という挨拶を飛ばしてしまった。授業が始まってから「しまった、挨拶すればよかった」と気づいたものの、そのまま授業に入ってしまった点は、まず重大な反省点の一つである。

もう一つは前後の回との関連づけである。今回は3、4、5、6回目をイギリスでまとめており、3回目が砂糖、4回目が紅茶、今回が料理、その次が贅沢禁止法と絡めて衣装の話をしようと思っている。前の2回でイギリスのことを話してきたので、学生も入りやすいかなと思っていたが、実際に授業に入ると普段よりも多くの学生が寝ていることは気になった。3回目の授業の際には、学生が寝るというのは気にならなかったが、昨日は退屈させたように感じた。これも意外であった。

生活文化史は隔年開講で、前回は全面オンライン形式だった。2年ぶりに対面形式となるなかで、学生の反応を見誤ったのが反省点の一つ。もう一つは、人数の多さへの配慮不足です。本科目は学部の共通科目であるため、心理学科とメディア映像学科の学生が受講者の半分弱を占めている。今回シラバスを組むときに、そんなに多くの他学科の学生が来るというのは想定していなかった。学部の共通科目という性格をもう少し配慮すべきだったのか、他学科の学生にはやや難しすぎたかもしれない。

授業内容については、例えば、昨日フィッシュアンドチップスの話を取り上げたが、もう少し分かりやすく、実物を見せてやったりとかすると、学生も入りやすかったのではないかと、なぜこんな魚のフライがイギリス料理なのかという問いかけを糸口にした方が、学生も話に乗りやすかっただろうが、今日のやり方だとやや間延びしてしまった。いずれにせよ、入り方がまずかったかと思う。

なお、料理の話をし始めたのは人間文化学科の専門科目のひとつをなすヨーロッパ史文献購読で、今回のイギリス料理の話は学生に結構受け、面白く聞いてくれた。2年前のオンライン授業においても他の回に比べて反応が良かった。その流れで今日初めて対面で話してみると、想定外の反応だったと言わざるを得ない。今日提出されたコメントを見ても反応はいまいちであった。

観察者：学生の視点を取り入れて話をしていると感じた。みんなが考えていることを自身で話していると思った。身近に感じられる人柄を感じた。プライベートの話と歴史の話を混ぜて話していた。学

生からのインタラクションというか、彼らが考えてアクションすることを授業の中で見られなかったが、他の授業ではあるのだろうか。今回は意図的に外しているのか。

授業者: 昨日は実施しなかったが、テーマによっては 1 週間前にアンケートを行い、その内容を授業の導入に用い、「皆さんどうですか」と問いかけるとともに、情報を共有することもある。出席者およそ 120 名の学生とのやり取りは正直なところ難しい。学科の専門科目の授業だと 40 名程度なので、まだ相互的な交流が可能である。もっとも、私の授業のリアクションペーパーの内容は学生に「丸投げ」だったが、今回は課題を 2 つ作成するとともに、自由記入欄も設けた。この手法は、これまでの授業研究で先生方からいただいた「課題を作成してはどうか」という意見を採用



させてもらったものである。そのコメントに対しては、個人的に返事をすることもあり、共有するために全体に返事をすることもある。このようなやり取りは、授業外で行うこともある。ただ 100 人を超える学生をうまくとりまとめられていないというのが、この授業での課題であることは間違いない。

観察者: 人数の問題もあるが、接することが多い学科の学生はいいが、他の学科の学生の反応を読むのが難しい。何度も学生とやり取りすることは難しいが、授業中に何度かあるといいのではないか。

観察者: 今、授業外という話があったが、授業の 90 分ということだけではなく、Cerezo 等を使用して完結していると思う。授業は非常に充実した内容であった。言葉で話すだけではなく、写真等を多用して、目で見てイメージが持てる内容であった。しかし、若干はある程度の学生とのやり取りは必要であると感じた。前回の研究授業の時にもコメントに書いたような気がするが、「間」が大事ではないかと考える。ずーとしゃべりっぱなしではなく、「間」が必要ではないかと考える。

授業者: 話が乗ってくると、ついつい止まらなくなってしまう。これが一番問題だと感じている。あえて、沈黙に挑戦してみるというのかもしれない。タイムブレイクなども間だと思う。メモ書きを見ながら、なるべく話すべきことを漏らさないように努めているが、悪いところは間がないことだろう。

観察者: 圧倒的な情報量であった。学生は情報を整理しきれないのではないか。

授業者: 情報の多すぎるのは、授業者の担当科目全体に通じる改善を要する点である。

観察者: レジュメ自体はあってもいいが、先生が強調するところ、目を通してほしいところがあってもいいのではないか。スライドだけで授業をやってしまうこともあるが、やはり文字の資料が必要であると思う。図表は分かりやすいので使いがちであるが、歴史などつながりがあるものの情報は、資料は必要であると感じる。

授業者: 昨日、学生に気付いてほしかった点がある。レジュメに労働人口に占める農業労働者の割合を示した表を掲載し、学生に見せたパワーポイントのスライドでは、イギリスとフランスを赤色にした。フランス料理がなぜおいしいのかという、この数字、つまり農業労働者の割合の多さに理由があるのではないかとコメントがほしかった。前期の「世界史概論」で感染症を主題としたが、その際に授業内容の「これとこれとこれが実はつながっていたことに気づいた」と書いた学生がいた。今回の「生活文化史」においても、ランダムにテーマをならべているわけではなく、歴史上の重要なできごと、つまり商業革命や産業革命やフランス革命、第一次世界大戦などがある程度「一つの線」になるように組んでいる。しかし、学生がその「線」に気づけないのは私の持っていく手法の悪さであると感じている。

観察者: 学生の中には何人かわかっている学生もいると思う。先生が話をしたときに、学生に投げか

けたときに、正解を出す学生もいるかもしれない。

授業者：冒頭で言及した、ワインの着色料を入れた実験とその結果にも学生が食いつかないかと思っていた。個人的には面白い結果だと思ったからである。学生に教えなければいけない内容もあるが、教える自分が面白いと思わないと学生も面白いと思ってくれない。

観察者：イギリスの食はまずいというのはよく聞くが、先生の切り口は面白いと思った。教養科目か専門科目か、また学年にもよってどこまで切り込んでいくかという難しい問題がある。途中で脱落していく学生もいるし、片方で引き込んでいく学生もいる。どこで引くかということが必要ではないだろうか。あまり説明しすぎて面白くないと感じられると困る。分からないなりに、面白いと感じてほしい。90分の中でどこまで教えるかということが重要ではないか。

授業者：すべての学生には無理であったとしても、脱落する学生を極力減らすという努力はできるのではないか。

観察者：キャッチーな、盛りだくさんな内容で話を組み立てられるのがすごい。準備もレジュメもすごい。つくりも丁寧である。しゃべり方も親しみやすい印象だった。途中、しゃべっている学生に注意するのもうまい。最後にコメントによって理解を踏るということであるのもいいと思う。イギリスの近隣の料理を取り上げて、他の国はどうか、日本はどうかという疑問点を書いてくる学生はいるのか。

授業者：他の国の料理はまずいと聞かないのに、なぜイギリスだけまずいと言われるのか何となく分かったというコメントがあった。いろいろな話を回収して話をして、最後に果たしてどのくらいの学生そうだったのかと思ってくれるか。半分くらいの学生が思ってくればよいと考えている。

観察者：学生がどのくらい理解しているのか、興味があるのかというので、ノートはどのくらいとっているのか、試験はどうしているのか。

授業者：資料にはすべては書いていないので、メモを取りなさいと指示を出している。評価に際しては、定期試験ではなくレポートを予定している。食文化と衣装が中心をなしているが、一連の講義のなかで自分が考えたこと、興味を持ったことに関する本を読んでもらい、何らかのレポートを書かせようかと考えている。高校までと違い、食文化や衣装も歴史なんだと気付いてほしい。感染症、あるいは食べ物で歴史の授業を組むことは難しいが、さまざまな切り口から歴史に関心を持ってほしい。歴史好きを一人でも作りたい。そのように願っている。

観察者：先程間の話があったが、あるコメディアンが言っていた。受けないときに特定の人たちに話をすると、気が動く。そのあと、一人一人に何人かに質問すると。そうすると気が戻ると言っていた。

授業者：先生方の意見をまとめると、やはり「間」をどうとるかということが問題だと思った。

観察者：数学の授業はどうか。先生がずっと説明しているのか。学生が解く時間を取るのか？

観察者：解く時間は大切である。自分で能動的に授業に参加するという意味もあるし、もう一つは理解、再現性というか、自分がインプットしたものをアウトプットしたときに学習のレベルが上がる、理解が上がる。この作業が数学では問題を解くということである。

観察者：学生が問題を解いているときは、先生はどうしているのか。

観察者：いろいろなパターンがあるが、一通り授業でやりたいことを話して、その後に演習の時間を設けている。数学は、学習歴が非常に長いので、学生に差がある。早くできる学生と時間がかかる学生がいる。ある程度説明した後に、演習問題を解かせて、できた学生から退室させている。そうすると学生が能動的にできる。そしてじっくり解きたい学生に集中して支援ができる。

授業者：以前に、「授業のやり方はたえず改善していかないといけない、常に見直さないといけない」とのコメントをいただいた。まさにその通りだと感じる。一つの科目を取っても、学科の専門科目なのかどうか、主な履修者の学年はどこなのか、他の学科の学生がいるのかどうか、などである。普段から考えていないわけではない。しかし、そのような意識をどこまで授業内容に活かしているのかどうか、絶えず見直さねばならない。先生からいただいたコメントを見ても、改めて考えさせられたし、自分で実際に喋ってみて、学生の反応を見ても同様である。何はともあれ、今後はいずれの授業にお

いても「間」を大事にしたい。さらに改善できるように努めたい。

ⁱ 北岡正三郎『物語 食の文化：美味しい話、味な知識 (中公新書)』中央公論新社、2011年、8頁。

ⁱⁱ 小野塚知二「イギリスの料理はなぜまずくなったか」佐藤清隆ほか(編)『西洋史の新地平—エスニシティ・自然・社会運動—』2005年、103-120頁。

第3回授業研究会 (第4回FD研修)

日 時：12月14日(木)2限(10:50~12:20)

場 所：01209講義室

授業担当者：劉 国彬 准教授

授業科目名：中国語Ⅱ

参加者：今井、大塚、記谷、鶴田、前田、日暮

【クラス構成】「中国語Ⅱ」は、初修外国語の選択必修科目である。このクラスは、人間文化学部、工学部と生命工学部の3学部の学生が受講している総合クラスである。受講者25名、再履修者は3名のほか、すべて1年生である。今年度からクラス人数を平均し、25名程度という人数をクラス編成することにより、以前より教えやすくなったように感じている。

【授業の目標】中国語Ⅱは、中国語Ⅰに続き中国語の発音を復習しながら、簡体字を覚え、基本的な文法事項をマスターする。こうした基礎知識を習得することによって、学生が簡単な中国語文章の読解、中国語による作文、リスニングと会話ができるようになることを目標としている。また中国の文化、社会の状況などを授業に取り入れる。

【授業方法】「言語を使って何が出来るか」は言語学習の目的であり、外国語学習は説明を聞いたからといって、読めるものではない。コミュニケーションスキルを総合的に育てる必要があり、そのために「聞く、話す、読む、書く」という4技能を身につけることが求められる。中国語は、学生にとって初修外国語であり、どのようにすれば「実際のコミュニケーションの場面で活用されるか」をいつも意識して授業をしてきた。受け身的な授業ではなく、自己発信、グループディスカッション、学生から積極的に発信していく授業を目指している。



「中国語Ⅱ」の授業では、テキストの第6課～第12課の内容を学修している。第6課は夏休み明けに、大学で会った時の会話、第7課は趣味に関する内容、第8課は物や人の数え方に関する助数詞、第9課は動作の完了、第10課は買い物、第11課は日付、第12課は時刻から構成されている。授業は2回ごとに1課を終わるペースで進めている。具体的には、まず単語の読み方を確認し、会話に関する中国の文化背景を説明する。その次にイラスト等を取り入れたパワーポイント資料を使い、文法事項を説明する。説明はできる簡潔にし、すぐに学生に習った文法事項を書かせて、書かせた内容を全員で答え合わせる。さらに覚えた単語と文法を活かして、会話の練習をする。最後に会話文を暗記発表する。

【授業研究の当該回】

授業研究回はシラバスの「第11回、第10課、これはいくらですか？」のお金の言い方と買い物の会話

である。買い物は実生活の中で不可欠の大事な場面であり、力を入れている部分である。第10回は、第10課の単語の読み方と書き方を詳しく教え、中国の買い物事情を紹介し、買い物の際に、使う言葉と習慣用法を覚え、値段の交渉も取り入れた。

授業研究回では、前回の授業で指示した課題、すなわち単語のテストをし、次に買い物に使うフレーズを復習する。また実際の映像を通して、中国の買い物場面を視聴した後、2人1組で買い物の練習をする。最後にみんなの前で発表するという流れであった。

第3回授業研究批評会まとめ

日時：12月18日（月）12：15～13：00

場所：学修支援相談室（1号館01322室）

参加者：劉、今井、小野、記谷、Suzuki、津田、鶴田、前田、松本、日暮

観察者：当日、授業研究資料が配布され、授業の狙いや、授業の到達目標が示されていた。黒板に当日の授業の流れが書いてあった。授業の振り返りをする。

授業者：今回の11回目は、中国のお金について勉強した。学生たちは実際に中国で生活していないから、中国のお金を使って買い物の言い方をどうやって学生に覚えさせるか悩む。そのため中国の文化を取り入れながら、実際に中国への留学や旅行などで役に立つ場面を想定した。コロナ以降、対面授業を大切にしないといけないと考えていた。オンライン授業では、学生と先生との距離感や、学生が実際に会話できないのをよく分かったので、学生たちに文化を紹介しながら、生活の場面に応じた会話をたくさん取り組んできた。お金を理解し、中国で買い物する場面はいろいろあるが、普通は値段をきいて支払う。まだ多くの庶民は、日本の朝市のような場所で買い物を楽しんでいる。そこは、ものが新鮮で、種類も多く、安い。学生たちが留学した場合、そのような場所に触れるはずである。まず「いくらですか」と尋ねて、相手が言った金額を理解し、値下げの交渉をするということに力を入れた。この流れを、学生に経験してもらうことが目的であった。具体的に、どうやってその現場のような形で買い物できるか。りんごや鉛筆のカードを配った。配る時に、よくできる学生には、金額の高いものや複雑なものを配った。理解がなかなか難しい学生には、学生にとってやりやすいと思う簡単な1元の鉛筆のカードを配布した。1.5元とか1.8元などのカードは配布しなかった。ここが授業で一番大事なポイントであった。また、毎回の授業で、必ず黒板に今日何をやるかを書いて、学生に心の準備をさせる。自分も今日の授業は、忘れないようにいつも確認できる。最後にメッセージカードを書いてもらう。このクラスは、総合クラスであるので、人間文化、メディア映像文化、情報工、機械システム工学科、海洋生物科学科の学生がいる。学生からいつもたくさんコメントをもらうので楽しみにしている。質問は次回、これは個別に解説するというものもあれば、みんなが共有した方がいいと思うものがある、その時黒板で解説している。授業のテンポは早くないと思っている。私は語学の出身なので、できれば一つ一つ分かるまで教えた方がいいと考えているので、スピードよりは定着させることが大事だと思っている。

観察者：確かに授業中にカードを配布して、最後に会話の練習をしていた。ループリックに、その時の商品選びについて意図があるのかどうかという質問があったが、学生によって選んで渡しているということが分かった。

観察者：学生に発表させているが、発音を修正する箇所はなかったのか。

授業者：いつもは修正している。今回は時間がかかってしまって、一人一人修正していると時間が足らなくなってしまうのが気になってしまい、修正しなかった。また、今回は、授業を見学している先生方がいたので、発音が直される学生がどう思うかが気になった。もう一つは、学生が発表するときに、語学の場合は、すぐ直さない方がいいと言われる。それはプライドを配慮する考えもあるからだ。それは後で直す方がいいと考えているが、どうだろうか。

観察者：私もそう思う。コミュニケーションの中で投げて、ちょっと変化球でも相手がキャッチする気持ちがある人であればキャッチしてくれる。コミュニケーションをしたい気持ちの方が大切であると感じる。

観察者：私だったらどうするかと思った。例えば学生に一箇所は直し、一箇所はみんなで共有してほしいところは、みんなで直すというのはどうだろうか。

観察者：以前の劉先生の授業であったか、マイクを持ってしゃべっている学生に、みんなの前で発音を直しているのを見て、

多分、私もそういう気持ちになると思った。しかし、みんなの前でマイクを持って発音するのはすばらしいと思った。

観察者：授業の11回目となるともう何回もそれをやってきているので、そういう流れであることを学生は分かっているのではないか。

観察者：得意な学生はいいが、苦手な学生が毎回みんなの前で発音を修正されたらどういう気持ちになるだろうか。毎回自分の発音がダメと言われ、毎回自分が例になるとモチベーションが下がるのではないか。

観察者：学生にそう取られないような接し方はないだろうか。

授業者：授業の中で、例えば発表する前にこの単語はみんなが間違いやすいから、何回も何回も練習しておこう。発表の後に、みんなが発音できない単語が間違っていた。では、みんなで直していこう。それをやったことがある。確かに教育者として学生に正しいものを教えなければならないし、それは学生が将来、自分がいざという時に使えるようにするためもなる。確かにそのアドバイスはよくわかるが、授業研究の時には、お互いに緊張していた。

観察者：発表が終わった後に集団でこの間違いが多かったという表現がよかったかもしれない。

観察者：そういう意味では、授業者：も観察者がいるということ意識して、普段通りにはできなかったということか。また、特に不正確な発音の場合は、その場で直して、1, 2度練習させてもいいのではないか。一字一字の発音がもう少し正確にできるような方法はないか、というループリックでのコメントがあった。今の議論を聞いて、集団の場なので、一人の学生の発音の間違いを、みんなが学修するための場にするということではできないのではないか。ただし、特定の学生に集中してしまうと傷ついて、次から発音できなくなると思う。教師自身がどういう方法を取るかということだと思う。ただ、明らかに、これはピンインに基づかずに発音しているものがあつた気がする。あれもこれもではなく、今回の中国語会話で、この言葉については全員が間違えそうな発音があるというところがあれば、その部分だけは、みんなにもっと確認しようとか、狙いを定めてやるというのはあるかもしれない。

授業者：確かに、ここは前期にすでに発音を勉強した部分である。しかし、なかなか日本語の発音に囚われてしまう。

観察者：集団の中でも学習をどう生かすかということであるが、これだけはこのところを、その部分だけをしっかり直すというのは方法としてはあるかと思う。

観察者：思ったよりも学生が発声して、よい発音をしていると感じた。後期の終盤にかかるころなので、よく学習している学生はそうなると感じた。しかし、会話練習の後、学生の声が小さくなって、元気がなくなったように感じた。前に出て発表して、恥ずかしくなって、発声する学生が減ったのかもしれない。それを考えて、もう一度発声させるために、教員はどうしてやるのがいいだろうか。



観察者：あの場面でマイクが必要かどうか考えた。自信がなければ、大きい声が出ないので、マイクを使ったのか。

授業者：前回までも何度か会話の練習をしたが、マイクがないと学生の声小さく、他の学生に聞こえない。他の学生の注意をひくためにも必要性を感じている。

観察者：今までの積み重ねの中で、マイクを使った方がいいという先生の判断だと思う。

観察者：バランスがよく取れている授業だと思った。そのバランスというのは何かといたら、書くとか話すとか、前に出て発表するとかである。言語になるまで、そういうものを習得するということろで言えば、話を聞くだけではなく使ってみるとか。時間的にも90分の中で飽きさせないようにワークをさせて工夫をしていた。今回、最終的に学生たちは全員発表していた。最初、学生に発表したい人と呼びかけていた。時間がなければ、何人かだけのペアがやるのか、毎回みんなが発表できるようにしているのか。

授業者：毎回、必ず全員が発表できるようにしている。何人か選抜するやり方でもいいが、やはり先生の判断になるので、やりたい学生が呼ばれないとショックを受ける。私も学生時代に、私がやりたいのに先生が呼ばれないと、ショックだった。私が目指しているのは公平的な授業、誰でも話すチャンスを与えられる授業をしたい。少し時間をかけても、みんなが口を開けて、声を出してもらうようにしている。

観察者：そういう意味では、全員がトレーニングとして、授業を通じてスキルアップできると感じた。

観察者：バランスがよく取れている授業だと思った。授業の録画ビデオの最初の30分で、学生たちは考える時間もあって、書く時間もあって、教科書を見たりと考えさせているなどと思った。もう一つは、学生たちはクイズがあることが分かっているので、自分でも本日の単語を勉強しないとイケない。だから責任を持って勉強する。それを学生たちが理解していることはいいことだと思った。最初から今日のレッスンに入れているので、学生たちが準備している。最後の発表のことも同じで、学生たちは、自分たちが発表をしないとイケないとわかっているので、責任もあって、教科書を見て、学生同士が相談したり、先生はすべてのペアの会話を見て、自分で会話を作って、先生がその会話を確認しているので、発表できる安心感があり、いいことだと思った。言語はやはり、学生たちは、教科書に書いているものを自分のものにするために書かないとイケない。それは時間かかることであると感じた。

授業者：英語や他の言語もそうだが講義とまた違って、言語の勉強は、いつも私は学生には、「私が今持っているボールを皆さんに渡します。皆さんが受け取ることができかどうか、それはどうやってこのボールを受け取って、自分がボールを使えるようなプレイができるようなことができるか、これはあなたたちのものになります。もし、先生がボールを持って、そのボールについて説明した形をとるだけで、皆さんが理解した、はい、分かりました。それはあなたたちのものではないはずです。」と例えてを言っている。言語は一つの道具とはいえ道具であるが、勉強のやり方はちょっと工夫して、学生が自分の身につけられる。例えば、来週はこの教科書の内容についてまるまる暗記発表する。それも一つのやり方であるが、学生に強制的に暗記させるが、暗記することで今すぐ使わなくなっても、いざという時にはこういうことがあった。確かに記憶の中に残っている。そうすると、実際にその国に行くと、これは以前覚えたことがある。では使ってみようとなる。ただ見て理解して終わったのでは、自分の頭の中に入っていない。私は中国語の研究について進めてきているが、日本の中国語の教え方は、東大とか京大とか昔から中国語をどうやって教えてきたかという、先生たちさえもほとんど中国語をしゃべれない時代の時に、学生に教科書をすべて丸暗記させる。とにかく覚えさせる。それが最初のスタートだったが、今もそういう伝統があるらしい。一年生には丸暗記させる。専攻の学生ではあるが二年生になってから応用とか。確かに私も日本語を勉強した時もそうだったので、暗記することで自分ものになると信じている。だから学生にも、隔週ではあるが、暗記の宿題を出している。

観察者：お金、紙幣を見せていたが、中国の紙幣があんなに多くの種類があるのかと思った。しかし、最近ではあまり紙幣は使わないという説明があり、勉強になった。また、発表のグループは最初から

決めているのか。

授業者：今回は後期の会話の7回目であったが、欠席する学生がいるとペアの組み方を変えないといけない。

観察者：学生は座席指定か。

授業者：席は決まっている。欠席の学生がいたので、ペアの組み方を変更している。

観察者：まず語りかけ方が優しいと感じた。学生も安心して聴けると思ったのが、まず印象的だった。昔は、文法をやって、本を読んで、訳して、ということがスタンダードな授業だった。それと比べると昨今話題のアクティブラーニングではないが、自分のアクティブラーニングの捉え方は、まず学生が能動的であること、次にアウトプットをすること、そして、表現する力を養いたいということがアクティブラーニングを言っている理由かと勝手に思っているが、そういう意味では、途中の発表の機会は、特にそういう感じがしたし、能動的に取り組んでアウトプットして、しかも表現すること、ということに沿った授業であったと思った。もう一つは自分の印象では、発表の後、学生の気持ちが授業へ入ったのではないかと感じた。発音の練習をしている時よりも、そのあとの方が授業に入ったように感じたので、会話の練習は有意義だと思った。初修外国語の位置づけをはどう考えているか。

授業者：彼らは専攻ではないし、一年間の学修だけで終わる学生がほとんどである。そういう意味では、彼らにとっては初めての外国語であるので、中国語はどういうものか、まず全体のことをわかってほしいことと、中国の文化とか、少しずつ付け足しながら、こういうものだと思ってほしい。たとえ一年しか勉強しなかったとしても、自分の経験の中で、将来社会人になってから、もしかしたら使えるかもしれない。その時に、中国語の勉強の基礎があるから良かったと思ってほしい。そして自分のレベルアップの基礎になればいいと思っている。中国語の場合は、基礎がすごく大事で、発音が間違っていたら直す。これは本当にすごく大事である。いい加減に覚えると、あとは難しくなる。中国語は初修とはいいいながら、しっかりと学生のために責任を持ってやりたい。

観察者：最初に中国語に触れるこのきっかけの時間ということと言うと、とにかく間違ってもいいから、まずしゃべって親しむということが大事だと思った。日本人は、特に間違いたくない意識がすごく強い。それが上達を妨げている。注意の仕方とかも考えながら、基本的にはしゃべるということに対して、ハードルを下げるということは、初修外国語の学修の機会では、特に大事だと思う。

授業者：ピンインの段階は、最初に、特に前期の授業で、発音の日本語のローマ字と英語のローマ字の違いを分けてしっかりと覚えてもらうようにしている。後期は応用であるので、今回は少し時間をかけたが、黒板でこの発音は、以前勉強した時にこういう発音だった。それをみんなで練習して、今日はここを間違わないようにしようと、気づいたときにはやっている。

観察者：スライドを使っていたが、毎回スライドは作成しているのか。相当な時間がかかるなと思った。

授業者：スライドは毎回使用している。全部で12課ある。全部スライドを作っている。

観察者：それは毎年というか、毎授業、進度に合わせて作っているのか。

授業者：ほぼシラバス通りに授業をしている。ただ毎年改善している。明日は第11回目の授業をするが、「今日は何月何日ですか？」の勉強をする。先程確認したら、去年学生が難しいと思ったところを今年は違う角度で修正して調整するつもりである。黒板に書くのを省略して、基本的にパワーポイントを使っている。そして、内容について Cerezo にアップしている。

観察者：ということは、毎年、毎回、スライドを修正しているということか。

授業者：特にコロナ禍があったので、スライドを作成していた。

観察者：今回初めて英語以外の言語の授業を見たが、英語だと学生が90分持たない。今回も学生がだんだん疲れてきているのを感じた。語学で90分の授業はどうかと考えている。

授業者：確かに学生がだんだんと疲れてきた。そういう時には、練習問題を配っている。違う角度から、書きながら、調べたりして、時間内に必ず完成させないといけないので、やらないといけない。

観察者：中国語教育を始めて何年目になるか。

授業者：20年くらいになる。以前は、こういう ICT の機械がなかった。教科書を読んで学生に覚えさせて、そして会話して、説明をして終わる、そういう授業だった。

観察者：昔の方が、内容が多くて、今の方が少なくなっているのではないか。

授業者：昔使った教科書は内容が多かった。

観察者：英語のクラスでは、何年か前から、人の心を心配して、みんなの前で立って発表するのではなく、ビデオを自分で作って、先生に送るスピーキングテストがかなり増えている。私はそれをやっているが、いろんな問題がある。最近の携帯電話はカメラの画像の質が高すぎてアップロードできない。アップロードしても時間がかかるケースがあるとか、学生たちはいろんな能力が必要となっている。先生の方も複雑になっていて、学生たちに、英語だけでなくテクノロジーの使い方もいろいろ教えないといけないようになっていて。先生の授業では、みんなの前で発表していた。私も、最初に大学で教えるときには、そうやっていた。発表の日を決めて発表していた。しかし、いろんな論文を読んで、私はこれをやめるべきだと思った。だが、最近はみんなの前で発表させるべきであると感じている。だんだん学生が人としゃべるチャンスが減っている。先生は、学生たちはみんなの前で立って発表させることに心配はあるか。

授業者：やはり学生を前に立たせた方がいいと思う。クラスの中に気持ちの弱い学生がいるかもしれない。そういう学生がいないことが確認できた上である。たまにそういう学生がいると、難しいと思う。もう一つは、最初のガイダンスで説明する。このクラスはこういうことをやる。できなくても大丈夫である、発表するときうまくいなくても大丈夫であると伝えている。対面授業のメリットを活かした方がいいと考えている。